

シリーズ 水にまつわる話 (1) — 田沢湖町 —

田沢湖は、田沢湖町、角館町、中仙町、太田町、千畑町、六郷町、仙南村の七ヶ町村に跨っています。今回より順次各町村の水にまつわる話を執筆して載せ紹介いたします。第一回目は田沢湖町です。



甦る田沢湖

…国鱒探し顛末記…

田沢湖町芸術文化協会会長

大山 文 穂

平成八年、田沢湖町観光協会発行の「田沢湖通信第三号」に掲載された「深湖魚・クニマス この魚を探しています」という、つぎのような内容の広告が話題を呼んだ。

……水深四二三・四メートルの田沢湖。日本最深の湖、田沢湖に生息していた深湖魚・クニマスは世界でも田沢湖以外では確認されていないといわれていた。残念なことに昭和十五年、電源開発と農地開拓という国策の名のもとに田沢湖に玉川の強酸性水が導入され、クニマスをはじめ多くの魚影が消えた。そして今、平成二年に「玉川酸性水中和処理施設」が稼働し、酸性水はある程度中和されて湖に流

れ込むようになった。最近では、あちこちにウグイの群れが見られるなど、湖の水質が改善されつつある。私たちは、田沢湖がかつての水質を取り戻したとき、再びクニマスを田沢湖に放流し、生まれ変わった田沢湖のシンボルとしたい。

……と、いうもので、探索は国の内外を問わず、発見された魚体は専門家の鑑定を仰ぎ、クニマスと分かれれば賞金として金百万円(後に五百万円)を差し上げる。というものであった。「クニマス」といっても、相

昭和四十三年五月、湖畔の濁尻に金色燦然たる「たっこ像」が建立されたが、あの伝説の主人公が龍神と化して湖の主となったとき、娘を案じて駆付けた母親が、湖心に姿を現した娘のあまりにも変わり果てた形相に、悲しみと恨みを込めて投げつけた、薪のもえさが魚になったといわれる伝説の魚であった。

クニマスについては、明治四十四年に発刊された「田沢湖案内」の初版から「湖の魚族」として紹介され、大正十四年の第四版にその特徴が次のように書かれている。

…一名「木の尻鱒」と称し、田沢湖の特産にして外国にもその例を見ずという。体色灰色を呈し、普通の鱒族の如く銀白色をなさず。これ日光の透徹せざる深き湖底生息する所以ならんか。(略)肉は白色にして少し桃色を帯び、脂肪少なく体長一尺余に達し、重量百匁に至るものあり。(略)国鱒は宝暦年間(一七五一〜一七六四)以前より生息せるものにして、安永、天明年間(一七七二〜一七八九)には非常の魚獲ありしという…

クニマスは通常三〇〜一七〇メートルの湖底に生息し、生態は人目にふれることはなかったが、周年漁獲があり、湖畔六十五戸の漁民はクニマス、ヒメマス、ウグイなどの魚で生計を支えていたのであった。田沢湖の悲劇的運命は、昭和十一年第六十九議会における東北振興電力株式会社創設の法案可決をもって決定的なものになった。

漁業組合ではクニマス漁に依存する湖畔住民の死活問題として、関係方面に反対陳情を繰り返したが、自然保護が優先される現代とは違って、急迫した時局に対応する工業力の増強に要する電力需要と、食料増産のための国営開墾という国策的「大事業の前には、所詮は螳螂の斧にすぎなかった。

やがて、昭和十二年五月三十日、生保内発電所建設工事が着工され、十五年一月十五日に田子ノ木取水口の爆破に成功、同月二十日から玉川河水が導入され、田沢湖は発電と灌漑用水のダムに変貌していった。玉川河水導入後の魚族への

影響は、当時の新聞などの予想をはるかに超えるものであった。僅かながらも漁獲をみたのは導入後の一年位で、その後は、発電による急激な水位の変動で湖畔は日々音をたてて崩壊し、舟付場さえ失った漁民は再び漁に出ることはなく、魚族の大方は絶滅し、以後半世紀、田沢湖は「死の湖」という忌まわしい代名詞で呼ばれるようになった。

平成二年、玉川ダムの関連事業として完成した玉川酸性水中和処理施設の稼働に伴い、最低PH4台まで落ち込んだ水質が急速に回復の兆しを見せ、待ち望んでいた関係者に魚族復活の夢が膨らみ、前記のクニマス探索の仕儀となったのである。

このクニマス探しには背景があった。田沢湖に玉川河水が導入される五年前の昭和十年の一月に、田沢湖から山梨県の本栖湖と西湖にそれぞれ十萬粒のクニマスの発眼粒が移植されていたのである。本栖湖は富士五湖でも最も西に位置し、水面高度九〇二メートル、面積四、九平方キロメートル、

最大深度一二六メートルの貧栄養湖である。

田沢出身の直木賞作家・千葉治平氏もかつてこの事実を注目し、知人を通じて調査したことがあったが、送られた資料にあったのはハナマガリセツパリマスという種類で、頭部が南部のハナマガリ鮭に似ており、体長の割に体高が高く、鯛のような形をしており、クニマスでないことは一目瞭然であった。

その後、クニマス探しに執念を燃やす湖畔の元漁師さん

や田沢湖漁協の幹部が数回本栖湖を訪れ、地元漁協の協力で調査したがクニマスの発見には至らなかった。

然し、である。クニマスは湖底深く生息する魚であり、障害物があつて刺網の利かない場合もあり、居ない、とは断定できない。それに、記録にはなくとも、どこか別の所にもクニマスの卵が移植されていないとも限らない。と、いうものである。

結果は、平成八年から三年間に十件の魚体が寄せられた

が、いずれもヒメマスと鑑定され、クニマス探しは一件落着となった。

その後の水質の好転は目を見はるばかりで、この後は極力水位の変動を押さえ、産卵床確保などの措置を講ずることにより、クニマスはともかく、田沢湖に魚族の復活がみられるのはそう遠い日のことではあるまい。

玉川河水の水質改善はこの川を水源とする下流の農民にとって、まさに藩政以来の悲願でもあったのである。